

# 認知症とてんかん

## はじめに

認知症だけでなく、てんかんも「記憶の障害」をきたすことがあります。つまり、物忘れ症状を理由に受診された患者さんの病気の正体が“認知症ではなくてんかん”である場合があります。また認知症と診断がついている患者さんがてんかんを発症する場合があります。物忘れ症状（記憶の障害）の原因がてんかんである場合には、抗てんかん薬で治療が可能になります。近年では認知症自体がてんかん発症のリスクになることも知られています。てんかんと認知症のそれぞれの特徴を理解し、的確な診断を行い、治療に繋げることが今後はますます求められるようになります。

## 物忘れ症状を引き起こすてんかんに疑うには？

脳波では“認知症に特徴的と言える異常所見”がなく、認知症そのものの診断に脳波検査は必ずしも必要ではありません。病歴、問診、知能テストならびに画像検査などから診断できることが多いからです。ただし、認知機能障害がてんかんにより生じている可能性が疑われる場合には、積極的に脳波検査を行います。どのような場合に、認知症よりも“てんかん”を疑うべきか下記に示します。

### 1. いい時とわるい時の差がみられる場合

ある時は記憶もしっかりしており、会話も自然に成立する一方で、別のある時には記憶力に障害がみられる場合には注意が必要になります。“いい時”と“わるい時”の差がみられるような場合、わるい時はてんかんの症状をみている場合があります。

### 2. 急に性格が変わったようにみえる場合、いつもと様子が違う行動をとるような場合

前述のいい時とわるい時の差は記憶力に限ったことではありません。きっかけや理由もなく急に怒り出すことなど急に性格が変わったようにみえる場合や、普段と比べ受け答えが不自然であったり、突然おかしい行動（無目的に廊下をうろろする、普段ならしないような）をとったりすることなどがてんかんによる症状の場合があります。

こうした症状を連続してあるいは間をおいて何度も繰り返すこともあります。このような場合には、あとで聞いても覚えていないことが多くみられます。また、症状の最中や、その後しばらくの間、見かけも表情がぼんやりしていて、周囲からの呼びかけに応じられない場合があります。なかには家族でないとおかしさに気がつかないような軽微な異常や、うとうと寝ているだけにしかみえない状態のこともあり、治療を行って振り返ると発作だったと分かる場合もあります。



いいときと悪いときが変わったようにみえる場合



急に性格が変わったようにみえる場合

## 認知症自体もてんかんのリスクになる？

認知症の原因疾患としてアルツハイマー病が最も多く、レヴィー小体型認知症がそれに続きます。それぞれに臨床像の特徴がありますが、これらの疾患にてんかんが合併しやすいことが知られています。

### 1. アルツハイマー病とてんかん

アルツハイマー病におけるてんかんの合併頻度は1.3-6.1%といわれています。65歳以上の一般人口でのてんかん有病率が約1%ですので、アルツハイマー病では、一般高齢者と比べててんかん発症リスクが高いといえます。アルツハイマー病では基本的に認知機能の日内変動はみられません。なおアルツハイマー病に合併するてんかんでは、意識を失う発作（焦点意識減損発作）が多いですが、体をこわばらせる発作（強直間代発作）や、体のピクツキが目立つ発作（ミオクロニー発作）もみられることがあります。

### 2. レヴィー小体型認知症とてんかん

レヴィー小体型認知症におけるてんかんの合併率は2.47～14.7%といわれており、アルツハイマー病と同じく一般高齢者と比べててんかん発症リスクが高いといえます。レヴィー小体型認知症では認知機能に日内変動がみられる場合があることが特徴です。眠気を感じる時間帯、特に夕暮れや夜間の中途覚醒時の幻視や、入眠中に怖い夢をみて大声を出すなどがあります。前述したようにてんかんも“変動のある認知機能障害”を起こすので注意が必要です。

また視覚の異常については、レヴィー小体型認知症の幻視と後頭葉てんかんの視覚発作の区別を行う必要があります。患者さんから丁寧に問診を行うことが大切です。レヴィー小体型認知症でみられる幻視は生々しく（小さな黒い虫がみえた、ハンガーにつるした衣服が熊にみえた、部屋に大勢の人が座っていたなど）、持続時間が長いのが特徴的です。一方で、後頭葉てんかんの視覚発作は、きらきらした光が流れてみえる症状（一次視覚野の症状）、物が歪んでみえる変形視（高次の視覚野の症状）などが典型的です。



アルツハイマー病とてんかん

### おわりに

臨床において、認知症とてんかんは似た症状を示し、かつ併存している場合があります。ご家族や介護者となる方がこれらの事実や症状の特徴を知っていると、実際に症状に直面した際に大事な情報を多く収集できることに繋がります。診察の場でこうした重要な情報を的確に伝えることが何よりも大切で、認知症であれてんかんであれ、より早期で確実な診断に大きな助けになります。